

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年作文の部 最優秀賞

松井樹のようになりたい

鳥越小学校六年

いしくら
石倉

だいすけ
大輔

受賞の言葉

すばらしい賞をいただくことが出来、とてもうれしいです。ありがとうございます。ありがとうございました。

これまでは、家族について書くことが多かったのですが、これからは、色々なことに関心を持ち、感動したことを文章にしていきたいと思います。

最近ぼくは、何でもないことにイライラする。これまでは素直に返事ができた母の一言、祖母の一言にも、カチンとくることがある。母や祖母にもっともなことを言われると、わざと悪態をついてしまう。乱ぼうにドアをしめたり、必要以上に足音を立てたりした後、すぐ自分がいやになる。そして反省してもまた同じことをしてしまう。

初めはそんな態度をとるぼくに、祖母も母もおこったが、最近はやかましく言わなくなった。

「そんな時期なんだろうね。エネルギーを持って余しているのかも。」と、母と祖母が話し合っていた。いつもぼくのことを優先してくれる祖母。何かとぼくとスキンシップをとりたがる母。不満があるわけではないが、なぜかイライラしてしまう自分が自分で不安だった。でも、母と祖母の会話を聞いて、少し気持ちが軽くなった。おこられると反発したくなるが、ぼくを理解しようとしてくれる母と祖母にぼくは素直になれた。

でもぼくは先日、妹にいきなりをばく発させてしまった。今思えばきつかけはたいしたことじゃなかったようにも思える。というより、妹の何にムカつたのか自分でもわからない。妹は普段から気ままで、調子のいい時は、頼みもしないことでも次々と世話を焼きたがる。しかし一つ調子がくると、手に負えない。平気で祖母や母をおこらせ、何度も外へほうり出されそうになる。そんなドタバタの中、ぼくはもくもくと宿題をする。ぼくまで巻き込まれないかとドキドキしながら。ぼくのアイスクリームをとって食べたことにも、友達にあることないことぼくのことをしゃべった時も、ぼくはがまんしてきた。でもあの日は、火山がふん火するように、ドカーンとぼくの中で何かはじけてしまった。最初はだまっていた母が何度か、

「もうよしなさい。」

と言った。それでもぼくは止まらない。

「頼むからオレの視界から消えてくれ。お前なんか・・・。」

最後の一言を言うより早く、パシンと音がした。音の後にほほに痛みが走った。目の前にびっくりした母の顔があった。『何で母さんの方がおどろいた顔をするんだ。』と思いながらぼくは母さんの顔をにらみつけてドスドスと階段を上がりふとんに入った。しばらくして母がやって来て、ぼくの名を呼んで肩に手をかけた。ぼくはその手をふりはらい、「オレは謝らん。全然痛くなかったからな。」

と言った。母さんは、小さな声で

「そうか。痛くなかったか。母さんはお前をたたいた左手が痛い。でもそれ以上にお前をぶたないかんかった心が痛い。」

と言って、部屋を出ていった。母は泣いていた。暗かったし、背中をむけていたから母の顔は見えていない。でもぼくはそう感じた。いかりに燃えていた心が急にざわついた。もしかしてぼくは、妹が一番弱い立場で、ぼくが本当に本気になれば立ち向かってこれない相手とわかっていたら、いかりをぶつけてしまったのかもしれない。

母はその後、何も言ってこなかった。ただ次の日の朝、ぼくの頭に手をのせ、

「昨日はたたいて悪かったね。ごめんね。」

と言って、くしゃくしゃと頭をなげた。ぼくは何も言えなかったが、母の手をはらいのけるようなぼくはもういなかった。

あの日の夜、なかなかねむれなかったぼくは、松井秀喜さんのファンである祖母の話を思い出していた。話を聞いてぼくも松井さんが好きになった。新聞の記事でも、テレビのコメンテーターの話でも松井さんはいつも人柄をほめられる。先日も新聞に松井さんのことが書かれているのを読んだ。高校生の時甲子園で全打席敬遠されても、表情一つ変えず、淡々と一塁へ向かった松井さんをほめた文章だった。悔しい顔をするでもなく、ふてくされた態度をとるでもない松井さんの姿が、ぼくの目にかんじた。ぼくは、妹にいきかりをぶつけてしまった自分がちっぽけに思えた。

松井さんは、きつと相手チームのピッチャーの気持ちを考えてあげられるほど、大きな心の持ち主だったのだろう。もしぼくだったら、自分との勝負をさける相手に、自分のイラだちを見せてわからせないと気がすまなかったと思う。それが何の意味もない行動だとわかっていても、どんなに有名になっても、どんなにまわりの人からほめられても、松井さんは少しもおごらない。土の中に広く深く強く根をはった大きな樹のような人だ。風が吹いても、強い根をはるための試練と受け止め、雨がふったらじつと耐えながらも、しっかりと根で水分を吸収し、もう暑い日中は、木かげを求めて集まった人に影をあげて、じつと静かに夜を待つ。そんな樹のもとには多くの人や動物が集まる。

ぼくもそんな大きな大きな樹のような男になろう。一番小さく弱い立場の妹にいかりをぶつけても、ぼくは大きな樹になれない。いらだちは、外に発散しても根がやせ細る。強い根にするためのこやしにするのだ。見るからに折れそうな木はいやだ。見た目は立派でも土の中の根がひよろひよろな木もいやだ。

ぼくのイメージする『松井さんじゅ。』まだ六年生のぼくはこれからいふろんなことがあるだろう。が、『松井さん樹』を目ざしてがんばろうと思う。

